

健常者になりたかった6年間



森崎 茜さん

はじめまして！森崎茜と申します。先天性の両耳感音性難聴(右 105 dB、左 95 dB)で、小学校以外は高知ろう学校に在籍していました。小学校での本籍は難聴学級ですが、朝の会から帰りの会までずっと交流学級で過ごし、放課後に難聴学級に寄ってから帰るとというのが1日の流れになっていました。なぜこういう形をとっていたかという点、『交流学級での学習は、それはそれで受けさせたかったから。なぜなら、小学校に入れた目的が同年齢の子どもの中で社会性を身につけさせるためだったから』だと母から聞いています。

私にとって難聴学級とは。プラス面としては①楽しい勉強ができる場所。クラスでやらないようなことを難聴学級の担任はたくさんやってくれました。②みんなより進んだ勉強ができる場所。クラスでの勉強はどれも簡単だったので、難聴学級の方で先取りした勉強を教えてくださいました。③しんどい時の逃げ場、休む場でもありました。そしてマイナスな面というのは、①担任が嫌いということ、②人と違うという現実を突きつけられるものであったことです。このどちらも障害受容ができていなかったがゆえのものではあるのですが、学級担任が隣にいることはとても恥ずかしいことで、特別扱いをされているのがとても嫌だったのです。でもいなかったら困るということも分かっていたのでかなり葛藤していました。

私の小学校時代の友人関係のトラブルについて。3人寄ればはじかれる。友達を束縛。障害に対する誤解。友人関係においては結構しんどかったのですが、今考えれば、早くに世間の目や自分の障害について身をもって知れたい機会だったなと思えます。教員としてどう支援をすればいいのかという視点から考えると、実際に教員ができることはあまりないかなと思います。ただただ、自分は味方だというメッセージを発すること、場面場面にに応じてその子のメンタルフォローをすることが大事なのかなと思います。子どもの逃げ場となると同時に、時々自分の障害と向き合わせるのも必要な支援だと思います。



さいごに。小学校6年間は、自分の障害と向き合わざるを得なくなる状況が多く発生し、障害があるという現実を突きつけられる最初の時期になると思います。特に人間関係においては、数々の葛藤を抱えるようになると思います。いろんな場面を経験していく中で、その場をしのぐためのスキルを身に着けるようになります。できているように見えてできていない、周りに合わせているだけのこともあるので、きちんとそこはどうなのかを見極めてほしいと思います。先生方だけはずっと子どもたちの味方でいてほしいです。その子の将来を見通して、逃げ場でもあり外へ一歩踏み出せる場でもある存在になって、粘り強く指導をしてほしいと思います。